

パール・バックの目

長 井 保

は じ め に

パール・バックは、あの“大地”で知らぬ人のないアメリカの女流作家で1972年、81才で亡くなったが、1938年“*The Good Earth*”（大地）に次ぐ“*Sons*” “*A House Divided*”の三部作が「中国農民の豊かで真実な叙事詩的描写とすぐれた伝記的作品」として、アメリカで最初の女流ノーベル賞を受賞して名をなすに至った。その後、中国に関する作品が次々と発表されたが、1960年代に入ってから目ぼしい作家活動はしていない。日本でも有数の英語研究雑誌の「英語青年」でも、その時期以来、彼女が没した時でさえ、一回も記事に採り上げていない。

筆者が研究材料とする“*The People of Japan*”は、1960年、彼女の作品“*The Big Waves*”が日本で映画化されるに当って、来日したころから、1965年の約五年間の間にまとめ上げあげられたものと推定されるが、女流作家に有り勝ちな「甘さ」といおうか、物の見方の安易さがある。又、1966年発行の書物としては非常に時代おくれの内容が盛っており、その素材が、他の日本紹介の作家のそれと、非常に類似している点が多いので、彼女の独創性が薄いのである。以上の三点を採り上げて、これが日本の大学、短大の学生の英語科の教科書として、適当かどうかを考え、合せて、外国人の日本の見方についても少しく言及したいと思う。

1

終戦後、日本に対する世界の関心が非常に高まってきて、日本に関する研究者も、また日本文学の翻訳家も数を増し、来日する大学教授も一般の旅行者も多い。その中でも、著名な人達は、必ずといってもよいほど、日本紹介の著書をあらわす。Pearl Buck もその中の一人である。こういう人達の中には、日本に馴染みが深く、本格的に日本歴史や日本文学を研究している学者（例えば、E. Seidensticker, L. Keene, E. Reischauer）も居れば、研究というほどでもないが、日本に滞在したり、旅行したりして、その見聞記を書く大学教授など（J. Kirkup, R. Dore, P. Milward）が居るが、Pearl Buck はどちらかというと、大体後者に当る。彼女は1927年中国擾乱の際、一家をあげて日本へ避難した時の他は、長期の滞在はしていない。そして彼女の晩年は戦争混血孤児救済のため世界各国を奔走し、その資金稼ぎに出版社に頼まれば、安易に、著作としたもののようと思われる。本論に用いる“*The People of Japan*”も、その中の一つであろう。

さて本書 (The People of Japan) は全部で15章から成っていて、勿論アメリカ人に読ませるために書いた日本紹介書であるが、本論ではその中の二章 —Moral Standards I. II. を中心にする。(THE PEOPLE OF JAPAN—EDITED WITH INTRODUCTION AND NOTES BY Y. QTANI—SEIBIDOに依る)

2

Pearl Buck は本書を書くにあたって、種々の日本紹介書を参考にしたが、その中の一番大きなものに Ruth Benedict の The Chrysanthemum and the Sword—Patterns of Japanese Culture (菊と刀) がある。この「菊と刀」は、1946年に発行され、その卓抜した内容、微に入り細にわたった論の進め方は、日本人はもとより、日本に関心のある世界の人々を驚ろかせた。中央公論 (昭和五十年六月号) の中で村上泰亮氏他は言っている「(戦後思想における近代日本像) まず第一期 (1945—1960) についていうと、最初にアメリカの人類学者ルース・ベネディクトの『菊と刀』の衝撃がある。戦争中に行われたこの周到な日本分析は、日本文化を恥の文化と規定し、近代的個人が確立されていない社会として日本社会をとらえていた。このようなベネディクトの発想は、けっきょく日本の文化と社会の「遅れと歪み」を示唆するものとして受けとられて (この受けとり方自体が当時の状況を象徴する誤解であるが) 多くの日本人に衝撃を与えたが、和辻哲郎を代表とする戦前派エリート知識人の少数の例外を除いて、以後の戦後進歩派知識人によって受け入れられ、あるいは自虐的に歓迎されさえすることになった」「菊と刀」は1944—1946年に執筆されたが、その動機はアメリカ政府の要請にあった。即ち1944年6月に、すでに日本の敗北を予定していたアメリカ政府はすでに日本占領政策の準備にかかり、彼らが殆んど無知と云ってよいほどの日本人の性格をもてあまして、その研究を彼女の依頼したのであった。そのことは「菊と刀」の第1ページに書き出してある。『The Japanese were the most alien enemy the United States had ever fought in all-out struggle. In no other war with a major foe had it been necessary to take into account such exceedingly different habits of acting and thinking……We had to try to understand Japanese habits of thought and emotion and the patterns into which these habits fell. We had to know the sanctions behind these actions and opinions (下線は筆者——日本人は合衆国が今まで、総力をあげて戦った敵の中で、一ばん得体の知れない相手であった。吾々とはいかにも違ったこの敵方の思想や行動を頭に入れて戦わねばならなかったなんて、他の大敵の場合には、なかったことである。……吾々は日本人の思想感情の習慣とそういう習慣になっていったパターンを知らねばならなかった。そういう行動と思想の背後にある強制力を知らねばならなかった、筆者訳) 著者 Ruth Benedict は1887年、ニューヨークで生れ、著名な文化人類学者であったが、同時に詩人でもあった。彼女が「菊と刀」を書いたときは57才、一度も日本に来たことはない。

参考までに、本論で引用する二三の作家の略歴をあげる。

Edwin Reischauer は1910年東京に生れ、父の宣教師と共に長く日本に滞在し、日本歴史を専攻した学者大使であった。本論に引用する *Japan Past and Present* (1945—1952) は *The United States and Japan* (1944) と共に、やはりアメリカの占領政策に資するために書かれたもので、日本をよく知りぬいた著者の、冷静かつ心情にみちた好著である。Pearl Buck も “*The People of Japan*” にかなり引用している。

James Kirkup は1959年日本に来て約12年間滞在し、二三の大学に教鞭を取っていたが、1971年故国英国に帰った。詩人・劇作家・随筆家である彼は、日本に関する著書を多数持っているが、ある時は日本を賞め、ある時は日本を貶したりして多彩である。この論に引用する “*The Year of Japan*” は日本の1970年の万博を評したものであるが、その舌鋒の鋭さは、時には悪意とも、取りかねないのである。

Donald Keene は、人も知る日本文学の泰斗で、1922年ニューヨークに生れ、現在コロンビア大学教授である。日本の古典に詳しく、目下大きな “日本文学史” を執筆中である。引用する “日本との出会い” は、彼が日本学者になったいきさつを述べ、“*Living Japan*” (1959) は日本の歴史、宗教、教育を全般的に解明したデラックスな書物である。彼の著書には、日本びいきの暖かい愛情が感じられる。

Ronald Dore は、1929年英国はイングランドに生れ、現在サセックス大教授、1950年来日し、日本の教育史を研究した。東京の下町に住み “*City Life in Japan*” を著わす。Benedict にみられないリアリスティックな日本人の描写である。

3

さて本論に入る前に、Benedict も Buck も日本を正 当に理解していたとは云えないけれど、それ以上に日本は外国からは、誤解又は曲解されている事実をのべる。この事について、前述の L Keene の “*Living Japan*” の序を書いた原沢正喜氏の言葉の使用する。 “…… a nation which has, so far, so often and so frightfully been misunderstood by most outsiders and which used to be dismissed merely as a strange, mysterious race inhabiting some obscure region in a remote part of the Pacific somewhere near the chinese mainland.” (下線筆者) というようにとにかく不思議で、神秘的で中国本土のそばのどこかの遠い所に住んでいる国民、というような捉え方である。概して西欧人はヨーロッパ文明は自分達の独創で専有物位に思っているから、その文明が実は余り遠からぬ昔に、ギリシャローマからの借用物だったことを忘れて、“神秘的な” “未開” の東洋の一国が、近代文明を打ちたたてた事に、種々の反感を持って、何かにつけて腹を立てる。1970年の万国博覧会は Kirkup をすごく刺激した。彼の “*The Year of Japan*” はただただ日本の誹謗に満ち充ちている。EXPO 70は “It was childish and unrealistic. It was lacking in artistic appeal……the theme of exposition was hypocritical. There is no progress and harmony……Indeed, Expo was hell on earth in Japan (それは子供臭くて、非現実であった。芸術的な魅力もな

かったし、そのテーマも偽善的であった。日本には進歩も調和もありはしないのだ。全くエキスポは日本では地上の地獄であったのだ(一筆者訳)と罵るのである。“坊主が憎けりや袈裟まで憎い”の流儀で “I saw few Kimono or hakama, but there was a number of ugly hired morning coats” (下線、筆者) と EXPO の開会式に出た礼服の人達を “見にくい、借りもののモーニングを着た人が一杯” とこき下ろしているが、昭和も40年代をすぎて、EXPO に招かれる人達でモーニングを借りる者はいない、多分、均り合のとれないとか不似合いとかいう意味で hired という語を用いたと思われるが、前後の口調からみて、まるで “猿にモーニングを着せた” ほどにも受けとれる表現である。街の看板の英語の用法が間違っているから、あれは English でなくて、Janglish、などとその皮肉はきりが無い、“The Japanese people are delighted when some event concerning Japanese occupies the headlines of the world's newspapers. They are proud that their JAL plane was hijacked by “samurai students” because it makes Japan seem modern and international……because they feel it internationalizes Japan and gives Japan fresh status as a modern country. (日本人は、自分の国の出来事が世界の新聞のトップ記事になると大いに喜ぶのだ。JAL 機がサムライ学生にハイジャックされると、それを自慢に思うのだ、というわけは、そんな事件が起きると日本が近代的になったり、国際的になったりするような気がするからだ。そんな事件が日本を国際化させ日本に近代国家として新たな地位を与えるのだと、日本人が感ずるからだ。一筆者訳) というに至っては、皮肉を通りこして、日本を見下げた罵詈になる。

4

こんな風に日本は諸外国に大いに誤解を受けているのであるが、そういう言葉の一つに “猿真似” というのがある。日本を批評する外国人は殆んどといってもよい程、この言葉を用いるのであるが、^{もと}原の語には、“猿” という語は用いてなくて、単に imitator. とか follower とか表現してあるが、それが訳語には “猿” がついているのは、多分翻訳者が、前後の文の調子で、この卑しい語をつけ、それが習慣となってしまったのであろう。

猿真似について二三の例をあげよう。

L. Keene の「日本との出会い (訳)」に出てくる。「そんな場合に『どうして猿真似の国の文学をやっているのか』とたずねられることが常だった。相手は猿真似の国といって、具体的に何を指していたのかはよく分らないけれども、この迷信は、是近まで海外ではほとんど一般に信じられていた。今でも東洋学会などが催す晩餐会に出席して、私の隣りに中国人が坐っているような場合に、相手は私の職を知ると、とにかく『日本文化は中国文化の真似に過ぎないね』と云いがちである」(P197)

一方、E. Reishauer は、“There has been, however, one very good result of Japan's consciousness of foreign borrowing. The Japanese take the process of acculturation for granted and are not afraid or ashamed, when circumstances dictate, to borrow whatever they need from abroad. Without the historical example of Japan's heavy borrow-

ing from China a thousand years earlier, it might have been more difficult than it was for the Meiji leaders to conceive the idea of repatterning Japan on Western models and to justify the course of action both to themselves and to their people.

(“Japan Past and Present)

(日本人は異文化を受容することは当然のことと考えて、事情が事情ならば、必要なものは何でも外国から借用することを、心配もしないし、恥とも思わない国民である。日本が明治よりも千年も前に、すでに中国からあの様に多くのものを借用したという前例がなかったならば、明治の指導者達は西欧をモデルにして、日本を作りかえるという考えを抱きもしなかったろうし、又その行動の方針を自分達自身にも、国民にも正当だと思わせることは難かしかったかも知れないのだ—筆者訳) と日本の真似を正当化している。

Keene はこれを一步すすめて、「要するに、真似が上手であることは日本の誇るべきところである。しかし、いくら真似が上手であっても真似する必要をも感じなければ文化の進歩のためにならない……明治初期には政府はしきりに一般民衆に対して『西洋人に笑われるな』と忠告して、日本人たちはそれに応じて一生懸命に国を現代化しようとした。タイ国にはそういう雰囲気がちっとも感じられなかった。むしろ、タイ国人は、外人はどうせ外人であるのだから笑っても構わない、というような態度をとっている。」(日本との出会い、篠田一士訳) 要するに文化に対する憧れを感じずだけの国民感情がなければ、真似は生きて来ないのだから日本人は文化を吸収する能力を備えているのだ、というのである。

ところが本論の P.Buck になるともっと寛大になってくる。“Whatever they have learned they have not used imitatively but creatively, taking what was useful to their way of life, changing and adapting and making a new. Their culture is an admirable blend of the best in other cultures and the indigenous culture of her own people” (the People of Japan p.3) (日本人は自分達が学び得たものは、真似をして利用するのではなくて、独創的に利用している。つまり自分達の生活に役立つものを取り入れ、それを変えたり、適応させたり、新しく作りかえたりするのである。彼らの文化というのは、他国の文化の最上のもので、自分達の生得の文化の見事な混成物なのである—筆者訳) この考え方は、奇しくも、日本古代史の権威、上田正昭氏の言葉と符合する。「日本は不思議な国である。土着のものと外来のものとが、これほど見事に調和している国は、そうざらにはない。そればかりか、古い皮袋に新しい酒がもられて、皮袋じたいがふくれあがり、そこに新たな色どりが添えられる。和魂漢才、和魂洋才、温故知新の言葉は、文字通り日本文化の展開にあてはまる。古きものと新しきものとの共存も、これほどしっかりとまとまっている国は珍しい。しかも新しきものは、常に外から導入され、その触発のなかに習合の日本文化が創造される。(日本の原像)

1. The People of Japan の内容の古さ

大体日本を批評する西欧の作家は、非常に冷徹な態度で、或る面では冷酷にさえも日本を見ているのであるが、P. Buck は本書の冒頭に述べているように「自分は母親の胎内にあった時から日本を訪れているのだから、日本を愛するように運命づけられている。だから日本には強い愛着を抱いている」“I inherited love for them from my parents, love for old Japan and old Japanese ways. Upon the solid foundation of love I discovered them through many years, and do still continue to discover, with each new visit and each new approach.” (P. 5) と女流作家らしい emotional な調子では始めているが、書物全体に通ずる論述のあいまいさ、甘さは、矢張り女流作家の故かと考えてしまうのである。一方作者が借用している「菊と刀」の内容や事例が約三十年も古いことから考えると、本書を教科書に用いる事の不適当さも出てくるわけである。

P. Buck の古さを云う前に、そのもととなった「菊と刀」の古さについて言及しよう。

Benedict は「菊と刀」を書くにあたって、高名な日本学者の Sir George Sansom (1880 生) の Japan; A Short Cultural History (1931) や Lafcadio Hearn (1850—1904) を引用することが多かった。Sansom は博学な日本学者で多くの日本批評家は彼を引用しているが、彼は Benedict が「菊と刀」(1944年)を書いた時より更に15年も前に上述の本を書いているのである。

次に Benedict の data のもととなった informant (情報提供者) についていうと、彼女は「文化人類学者として、日本人のことを書くのなら、現地の日本へ行って、日本人の家庭に入りこんで data を取るべきだけれども、戦時中なのでそれも不可能なので、やむなくアメリカに居る日系人から話を聞いた」と云っている。併し考えてみると、1944年ごろに日本を語り得る成人の日系人(日本人)は、少くとも日米関係が険悪になる1940年以前に米国に渡った人である。つまり1900年前後に(明治の末期)生れて、明治、大正、昭和初期の古い日本の教育を受けた人か、さもなくばもっと古い、明治時代の教育をごっそり身につけた人達なのである。その上この人達は、いわば移民であって、日本ででの生活を喰いつめた地方人が多い。日本文化の中心の東京・大阪の知識人ではない。海をへだてた向うの故国日本では、どの様な西欧文化が流入し、どの様な思想の変化があり思潮が在るかということは殆んど知らない。彼らは、新しい世界で自分達の生活の礎をきづく事に忙しく、そういう高度な知識は持ち合わせて居なかったと思ってよかろう。情報文化が今ほど発達していなかった時代である。そういう情報提供者から得たいわゆる“なまの言葉”は、その時点ですでに古いのである。そういう「菊と刀」を大部分借用した P. Buck の The People of Japan がいかに古いかは、これをもって解るであろう。即ち The People of Japan の発行年1966年から考えると、まさに四・五十年以上も古いのである。これを現代1970年代の日本の学生に読ませようと編集するのである。

尤も、他の著者にも、古い作品を教科書用に編集出版をすることはある。併しその場合は明確に「古い」と断っているのである。例えば E. Reischauer の名著 Japan Past and Present (1945) を1963年に、その抜萃を教科書にするために次の様書いている…… “these three

chapters are now quite out of date as a presentation of postwar Japanese developments. I first wrote 'Japan Past and Present' in the early autumn of 1945, just after the close of the Second World War" と (下線筆者) 戦後の日本の発展を伝えるには余りに古く……と恐縮しているのである。又、L. Keene は Living Japan (1959) の抜萃を1971年に出すにあたってその編註者の原沢正喜氏が断っている「"Living Japan" is now not quite up to date presumably to some embarrassment of the author」(下線筆者)

2、作者の判断の安易さについて

作者は、戦後の日本について色々書いているが、日本の事情をよく知らないで、他の作者がそう云っているからそうなのだろうと、日本にとっては重大なことを安易に解釈している。「天皇は現神である」とは戦前の小中学校で教えられた言葉であるが、この天皇の神性(diety)ほど西欧人に奇異に感じられた語はない。彼等は diety に対しては、ギリシャ神話の神々とか、又はキリスト教的な God とかの意味を附しているから、生きている人間を神として拝するということは、日本がどれほど野蛮国かの感を与えたにちがいない。その神と崇めた“天皇”が日本に在位する限り、日本は、日本人は変わらないのだと断言する個所がある。彼女は、「一旦は日本は変わったのだ」と述べたあと “yet there was no change. After all I have said about change; I regret. That is to say there was no change at the heart, which is the empelor. So long as the center remains unchanged, Japan will to the same extent be unchanged…… The hard core is there, yesterday, today, and so far as one can see now, forever. (下線部 訳一 芯に変化がなければ変化がなかったのだ一 芯とは天皇の事をいう。中心がそのままで居れば日本は一中心の変わらない程度に一 変りはしないだろう。固い芯は昨日もあったし今日もある。多分吾々の見る限り永久に存在するだろう) 天皇は終戦直後「天皇の神性」を廃棄する宣言をするようにマックアーサーに求められたとき「もともと持っていないものを『棄てる』という話はない。日本の国民は、私を西欧流の神の意味で信じているものは、一人もない筈だ」と言われたという。その通りである。これは強いてそう信じこまされた軍人階級を除いて、すべての国民感情であったのである。そして今でもそうである。P. Buck には、そういう細かい日本の国民感情は理解出来なかった。

彼女は1960年、丁度60年安保の反対運動で騒然としている時に来日したが、その事を批評して曰く、“The presence of many of these college boys in protest marches around Tokyo as members of Zengakuren demo must be explained in part at least, by their having too much time on thir hands” (下線筆者) 全学連の学生は、余り暇がありすぎるから、ああやってデモをするのだ、と云うに至っては、素人の巷間の人々の雑談にすぎない。この言葉は当時、安保を理解しない家庭の主婦などが、彼らを非難して吐いた批評そのままである。この安保騒動については、E. Reischauer は、次のように慨嘆している。“The rioting crowds that clamored at the gates of the Japanese Diet building in May and June

and the throng of Zengakuren students who snake-danced wildly down the streets of Tokyo and swarmed over Hagerty's car at Haneda Airport have given pause to many persons in both the United States and Japan…… Never since the end of war has the gap in understanding between Americans and Japanese been wider than over this incident. All this reveals a weakness of communication between the Western democracies and opposition elements in Japan. (Two Essays on Japan p.1) (この五月、六月に、日本の国会議事堂の門前で大声で喚きちらしたあの暴徒、そして東京の街々を狂気じみてジグザグ行進し、羽田の空港で、ハガチー氏の車に押しよせた全学連の学生達を見ると、吾々合衆国の者も又日本の人々も、はたと考えてしまうのである。……この事件のことを考えると、終戦以来、日米両国の相互理解のギャップがこんなにまで深いことはなかったと思われるのである。この事はみな西欧諸国の民主主義と日本の反対勢力とのコミュニケーションが何と弱いかを示すものである。筆者訳) 米政府の日本占領政策の成功を祈って、Japan Past and Present の大作をものした Reischauer にして云える、心の危惧であった。

さてもう一例をあげてこの項をやめる。P. Buck は戦後の日本の状態の一部を描いて、次の様にいう。

"The two peoples discovered each other for the first time as they really were and came to a new understanding each of the two. The mutual discovery grew into a genuine liking which in many individual cases was expressed in love. Americans were married to Japanese women, children were born, sometimes out of wedlock, and thus the two races mingled. (下線筆者)" (この二つの国民は、初めて彼らのありのままの姿を発見し、お互を新たに理解するに至った。この相互発見は純粋な好意に進展し、それは多くの個々人の場合には、愛情で表現された。アメリカ人は日本人と結婚し子供が生れ一庶出になる場合もあったが一斯くして、この二民族は混合した。筆者訳) 下線についていえば、mingle という語は mix の意味で mix はC. O. D. によると、"Put together (two or more substances or groups, one with another) so that the particles or members of each are diffused among those of the others (also of immaterial things)" とあって、一つのものが、他のものの中のあちこちに散在していなければならぬのである。殆んど同数で二つが混り合っていないければならないのである。米人は果して、日本にあってそうであったろうか。当時米人と結婚したものは、多くは米兵の根拠地に屯した一部の娼婦にすぎなかった。この事実を知らないで、大胆にも、日米人の混婚などを堂々と謳いあげる作者の安易な判断に顰蹙するものである。尤も、もう少し同情的に考えると、本書をかいた当時は、彼女は、戦争混血児の救済活動に全精力をあげていた最中だから、考えが自づと、そちらの方へ廻って、強調的に書いたといえ、そうも云えないこともない。

3、The People of Japan には「菊と刀」の論述事例に酷似している点が多いこと（「義理」ということを中心に）

この二書の類似点は実に無数に現われてくるので、「菊と刀」の方は次の三章に限定した。これは Benedict の論述の主眼をなす個所である

- 1) Repaying One-Ten-Thousandth (万分の一の恩返し)
- 2) Repayment Hardest to Bear (我慢のならない義理の返礼)
- 3) Clearing One's Name (汚名をすすぐこと)

The People of Japan は次の二章に限る。

- 1) Moral Standards—I (道德の規準)
- 2) Moral Standards—II

さて類似点を考察する前に、Benedict の「義理」について極く極くの概略を書こう。

Benedict は「義理」を日本人の道德の規準の第一とする。この「義理」観念は日本人独特のものであって、元は中国から渡来した儒教の忠、孝の思想から分派したものである。忠孝は、主君や親から受けた恩を返す徳であって、「義務」と呼ばれ、何時その義務を行なうか、どんな風に、どこで行なうかについては規定はない。ところが「義理」(適当な英語の訳語がなく、忠孝を仮に duty と訳せば、「義理」は obligation とでもいおうか)は、他人や世間からの好意は、そのままうけるだけではなくて、その好意を返さなくてはならない、そこに「義理」という観念が生れて、「義理」は日本人にとって重い荷となり、適当な時期に適当な程度に“返礼”しなければならない。これを「義理を返す」(repayment of giri)という。この返し(reciprocation)には、物質的な面と精神的な面がある、この精神的に受けた好意も、殆んど物品に換算されて返すわけであるが、ここに見逃してはいけないのは、自分に受けた侮辱とか、名誉毀損に対する報復も「義理」を返すことにつながるということである。これは即ち「汚名をそそぐ」(clearing one's name)ということで、日本人の重要な行為の一つである。一方、各自が分限を守って、出すぎた事としないのもいわゆる所を得た(taking one's station)として、義理と守ることになる。この「義理」がどうしても果されない時には、その代償として自殺にまで進展する。日本人はこの大切な義理と果すために、非常に細かなルールを設けてあって、いわば行動の「地図」が描かれてあって、それに従いさえすれば、楽に世渡りが出来るようになっている。世界第二次戦争で敗北した日本国民が、あんなにも好戦的な国民が、おどろくほど敵国占領軍に好意的、友誼的であるのは、彼等がお人好しであるからとか、その方が得だからとかいう損得から出たものでなくて、自分達が受けた敗北という汚名を、占領軍に従順に、友好的にふるまうという事で、すすごうという気持ちから出るのである。もし米軍が、彼等を虐待したり、威したりして暴力をふるおうものなら、どんな反乱が起るかわらない、米占領軍も心して、日本を治めて、その占領政策を行なわねばならない、としているのである。Benedict はつづけて、この「義理感」は一朝一夕に日本人の心に植えつけられたものではない、この「義理」を外国人が理解するには、日本人の「修練」(self-discipline)ということと、幼年時代の日本人独特の「しつけ」ということを知らねばならぬ、と云っているのである。

次に、Buch の Moral Standards のあらすじを記してみる、

①日本の道徳の規準は、他人に対する義務 (obligation) を遂行することにある。遂行しさえすれば、結果が悲劇になってもかまわない。duty (義理) というなかには、自分に恩恵をかけてくれた人に対する義理と、自分の名に恥じないという自分自身に対する義理と二つのものがある。

②この二重の意味を持っている義理観念を日本人に植えつけるには、自己の修練 (self-discipline) が必要であるが、それは子供の生れたとたんからはじまる。self-discipline はいわば“愛情の網”であって、この網は、子供が大きくなるにつれて、子供を固くしめつけてゆくのだが、この網があつてこそ、個人の行動がその網の中で安定するのである。この網は日本人の一種の伝統 (tradition) であるが、“人情” (human feelings) もその伝統の一つであつて“義理の遂行”という重荷のはけ口になっている。マツクアーサーが日本占領政策に成功したのも日本人の“人情”を利用したからである。

③日本人の生活の key になる語は self-discipline, duty, obligation であるが(筆者—どの語が義理、義務にあたるか、あちこちで不明瞭に用いてあつて判然としない) これらは human feelings (筆者—自然の人間の感情—五官のことが、又は日本流の“人情”なのか判明しない) と矛盾する面がある。併し、“義理を遂行しないこと” “自分の分限をわきまえないこと” “競争相手をおとしめること” は日本人の恥とされていて、この恥 (汚名) をそそげない時は、死んで詫びなければならない。

④だから giri というのは moral imperative (道徳命令) で精神的な義務といえる。フランス語の noblesse oblige に相当して、社会上の身分が高くなればなるほど、その強制力は強い。

⑤こういう風に“義理を果す”ということが重荷である日本人は、自分に関係ない他人から恩恵を受けることを喜ばないし、他人に恩恵を施こそうともしない。

⑥義理から行なう贈答も、それを返す場合の種類、値段のルールがある、その伝統を外れると自殺することもある。

⑦終戦直後は、すべて古い伝統は破棄されたかに見えたが、二十年経った今、又元に戻ろうとしている。

以上であるが、彼女の作品のどの点が、「菊と刀」に類似しているかを挙げよう

まず作者は前掲①の項に入る前に、次の叙述がある、「アメリカ人は道徳感情やその基準を、spirit (精神) と flesh (肉体) に分け、その各々が相反するものと考えているが、日本人は「人間は優しい魂と荒々しい魂があつて、それを使い分ける」 “They (Japanese) believe that a person has two souls, each necessary. One is the ‘gentle’ soul, the other is the ‘rough’ soul. Sometimes the person uses his gentle soul, Sometimes he uses his rough soul. He does not favor his gentle soul, neither does he fight his rough soul. Human nature in itself is good, Japanese philosophers insist, and a human being does

not need to fight any part of himself. He has only to learn how to use each soul properly at the appropriate times” というに対して、Benedictは、

“These Japanese view on ‘human feelings’ have several consequences. It cuts the ground out from under the Occidental philosophy of two powers, the flesh and the spirit continually fighting for supremacy in each human life. In Japanese philosophy the flesh is not evil. (下線筆者)” (P.189) (「人情に関する以上の様な日本人の見解は、五六の帰結に到達する。その見解は、西欧の哲学—人間には肉と精神という二つの力があって人間の生活の中でその優位な権力を得るためにはその二つが絶えず戦っているのだ—という見解をごっそり覆えしてしまう。日本の哲学では、肉は悪ではないのだ」更に彼女は、Sir George Sansomを引用して “They believe that man has two souls, but they are not his good impulses fighting with his bad. They are the ‘gentle’ soul and the ‘rough’ soul and there are occasions in every man’s—and every nation’s—life when he should be ‘gentle’ and when he should be ‘rough’. One soul is not destined for hell and one for heaven. They are both necessary and good on different occasions (彼等は人間は二つの魂をもっているが、それは彼の心の中の悪と戦っている良い衝動とはちがうと信じている。その魂は“優しい”魂と“荒々しい”魂とであって、あらゆる人、又は国民の生活にはその“優しい”魂と“荒々しい”魂とを使いわけねばならぬときがある。一つの魂が地獄へゆくとも、もう一つが天国へゆくともきまっていない、両方共必要で、種々の場合に善良なのである。)

この二つの叙述をよみ比べると、P. Buck が一つの提言をどんなに上手に、もちって、自分の作にしているかが解る、類似の一例としてこれを挙げたが、こういう例は続々とある。

類似の在り方を二点にしぼって考えると、その内容と、事例そのものになる。Buckのいわゆるもちり方の一般的な方法を見てみると、まず一つの提言又は断定を出す、その次に必らずとっていいほど、日本の家庭の描写が出てくる。この描いている内容は、初めの提言にとつては、冗長だったり、見当ちがいだったりするように見えては居るが、実はその叙述の中に、Benedict の諸説を、あちこち、短かく入れているのである。ある時は言葉そのものであったり、ある時は「菊と刀」の或る章の題そのままであったりする。

Benedict は giri という事を主体にして論を進めているのであるが、その giri をよく理解するためには、日本の子供の“しつけ”をよく理解しなければならないとして、The Child Learns という章を作って、子供のしつけの事例を上げているが、Buck の方は、日本の道德の規準はまず、self-discipline から始まるとして、Benedict の事例をそっくりそのまま出しているのである。

さて「菊と刀」及びその以後の外国の日本研究家が必らず取り上げた「義理」について原文をあげてやや詳しく考察しよう。Buck は日本人の道德生活の key words は self-discipline, duty, obligation だといっているが「義理」にあたる語はどれなのか判然としない。このことは Benedict も言及して、訳語を用いずに giri とか gimu とかと表わしている、他の作

家も同様である。Buck の提言を書こう。

What is giri? If pressed into Western terminology, giri is a moral imperative, a spiritual obligation which, if it cannot otherwise be paid in full, must be fulfilled by destroying one's life. Perhaps it is best expressed by the old French phrase *noblesse oblige*. Or, if one is to use the words of a Japanese dictionary, 'giri is the righteous way, the road human beings should follow; something one does, though unwillingly, to foretell apology to the world; Giri relationships are those a man has towards his family, his in-laws, to those above him in station and government, and to those beneath him who are dependent on him. It has to do with ones' personal honor in all relationships; it has to do with 'clearing one's, name' with 'keeping one's proper places' with paying debts and reciprocating gifts and kindness, indeed, with virtually every area of Japanese life. (義理とは何であるか、もし西欧風な用語を用いれば、義理とは道德上の命令であり、精神上的の義務であって、それが十分にまもれなかったら、死を賭しても遂行しなければならぬものである。それは古いフランス語の *noblesse oblige* であると表現すれば最も適当であろう。或は日本語の辞書の語をつかうとすれば、「義理とは正義の道であって、人間が踏まねばならぬ道である。たとえ不本意ながらも、世間に対して云い訳の出来るようにふるまうべきものである。」義理の関係は、自分の家族、義理の家族、自分より地位が高くて自分が支配されている人、又は自分に頼っている部下とも成り立つものである。それは、あらゆる関係にある個人的な名誉とも関係があり、『汚名をすぐすこと』『各自その所を得ること』とも関係があり、負債を返したり、贈物や親切な行為に対して返礼をすることとも関係がある。全く、日本人の事実上の生活すべてに係わりのあることである」(筆者訳『 』内は「菊と刀」の章題)

この定義に対して Benedict の論をあげる。 "There is no possible English equivalent and of all the strange categories of moral obligations which anthropologists find in the culture of the world, it is one of the most curious. It is specifically Japanese. Both chu and ko Japan shares with China and in spite of the changes she has made in these concepts they have certain family likeness to moral imperatives familiar in other Eastern nations. But giri she owes to no Chinese Confucianism and to no Oriental Buddhism. It is a Japanese category and it is not possible to understand their courses of action without taking it into account. No Japanese can talk about motivations or good repute or the dilemmas which confront men and women in his home country without constantly speaking of giri.

To an Occidental, giri includes a most heterogenous list of obligations ranging from gratitude for an old kindness to the duty of revenge. It is no wonder that the Japanese have not tried to expound giri to Westerners; their own all-Japanese dictionaries can hardly define it. One of these renders it—I translate: —'righteous

way, the road human beings should follow; something one does unwillingly to forestall apology to the world; This does not give a Westerner much idea of it but the word 'unwillingly' points up a contrast with gimu." P.133 (どう考えてみても、英語には「義理」にあたる語はない。そして文化人類学者達が世界の諸文化の中で発見するあらゆる不可思議な道德上の義務の中で、これ以上 curious (不思議) なものもない。それは特別日本的なのである。「忠」と「孝」の徳は中国にも在って、日本ではこの徳の概念には変化はあったけれど、ともかく他の東洋諸国によく知られている道德的命令とも或る程度同族的な類似点を持っている。併し「義理」は中国の儒教にも、東洋の仏教にも負う所がない。それは日本の範疇であって、「義理」を考慮に入れないと、日本人の行動の方針を理解することはむずかしい。日本人は、何かある行動の動機や、良い評判や又は人々が自国で遭遇するジレンマなどについて語るときには、きまって義理を口にするのである。

西欧人にとってみても、「義理」は非常に多様な異質的な性格をもっていて、昔うけた親切に対する返礼から、復讐の義務に至るまでを含んでいると考えられる。日本人が今まで西欧人に「義理」を説明しようとしなかったのも無理はない。日本自国の日本語字典でさえ、その定義は殆んど出来ない。その字引の一つに言っている様に一私が訳するのだが—正義の道、人が踏み行なうべき道、不本意ながら、世間に言いわけをするためのもの、—これでは西欧人にさっぱり解らないけれど、unwillingly (本本意に) という語は“義務”という語とはっきりした対照をなしている—筆者訳) といって、義務と義理を区別するのである。「義務」は、たとえばその遂行がどんなにむずかしくても、親しい家族の仲間や、国の象徴天皇に対して持っている義務観念であって“不本意”などという語で表現されるものではない。併し義理を返す、という内容には不安感が混っている。又、「義理」には、世間に対する「義理」と、自分の名に対する「義理」があって、前者を *giri to one's name* とよび、つまりは *the duty of keeping one's name* であるというのである。前掲の引用文とそのあとの概略中に、P. Buck がどの様に Benedict から借用しているか、理解できることであろう。

Buck は以上のような義理を観念づけるには self-discipline が大切で、それは日本の家庭では子供の生れた時から始まるとして松本家なる家庭の描写にかかるが、短い論述の中で六ページ半も割いて、子供の生れる話から、しつけの面までの事例をあげているが、その事例が殆んど全部「菊と刀」からの借用である。つまり Benedict が *The Child Learns* の章の中で述べていることそのままである。

○日本の女性は名をきずつけるから、分娩時には声一つ立てない。

○子供が言うことをきかないとお灸をすえる。

○女の子は殊に寝相に気をつけさせる、両脚をまっすぐにのばして寝せて乱れた格好はさせない。

○幼ない子供が気嫌と悪くしたらキャンディを与えて気をそらす。

○子を生む父親は、子を生むことによって家の血統が続くから、大いに喜ぶ、とかすべて

「菊と刀」のPP. 255～256、P. 260、P. 267、P. 268に載っている記述そのままである。この中で、お灸をすえるという事は西欧人にとって余程奇異に聞えると見えて、Benedict は、お灸のすえ方、もぐさの量までこと細かに描いているが、Buck もそのまま取り入れている。お灸をすえたり、女の子の寝相をとにかくいうことは、Benedict の時でさえ、日本では前時代的な風習で行なわれていなかった。Buck はそれを1964年オリンピック日本開催の時に、大げさに取り上げるとは、…と筆者は嘆息せざると得ない。

「かくて義理の重荷は重く日本人の心にのしかかっているので、日本人は、自分に関らない人からの恩誼は受ける事を快よしとせず、又他人に恩誼をかけることはしない、つまり他人に対しては、常に完全に無関心である」と Buck はいうのであるが “The smallest favor, even the offer of a cigarette or a glass of water demands reciprocation. Because each gift, favor or a word of praise must, in effect, be paid for, the Japanese will often go out of this way to avoid being recipient” (たばこ一本もらうとか、水一杯もらうとかのごくごくわずかな恩誼でさえも “お返し” が必要なのである。贈物でも、好意でも、賞讃の一言さえも、結局は、返さねばならないのだから、日本人はそういうものの受け手にならないためにも、こういうことから抜け出したいと願っているのである。筆者訳) (The People of Japan P. 44) これと同一のことを Benedict は「菊と刀」P. 105で “Even the offer of a cigarette from a person with whom a man has previously had no ties makes him uncomfortable (今まで係わりをもったことのない人からたばこ一本もらってさえも不愉快になるのだ—筆者訳)” といっている。

もう一つ符号を合わせた様に一致している例として、日露戦争終結の時の有名な乃木、ステツセルの話がある。Benedict は、 “The Japanese Since VJ-Day” の章でこの話を出しているのであるが、その文章の表現は、筆者が幼いころ小学唱歌で学んだ「水師營の会見」とそっくりそのままである。 “The two generals clasped hands. Stoessel expressed his admiration for the courage of the Japanese and…… General Nogi praised the long and brave defense of the Russians ……” と邪推すれば、あの歌をそのまま訳したかに思われる。Buck も又 PP. 34～35 にかけても同じ内容を殆んど同じ表現で伝えている。ただ違っている点は Buck がこの話を、日本人のいわゆる「人情」の厚さの例に引き出しているのに較べて Benedict は、もっと冷静な、彼女流の心理分析の例に出していることである。即ち、義理を返すという心情の裏を返すと、自分の受けた汚名は必らず種々の方法ですすぎ、受けた侮辱は必らず復讐するという心情になるから、日露戦争は戦争でこそあれ、ロシア人は日本人に対してなんの侮辱も与えていない、従って敗将といえども適当な礼を以って返すのが日本人の心理と、彼女はいおうとしている。この日本人の心理をわきまえて、当時の占領政策を成功させよと米政府に忠言しているのである。

さて、その遂行に失敗すれば自殺にまで追いこまねばならぬ日本人の「義理」又は「Bened-

ict の義理」については、他に種々批判する人も居る、その中の一人 R. Dore の *City Life in Japan* (1959) から引用する

"The Japanese word *giri* has become known to sociologists and anthropologists as a result of the prominence it received in Ruth Benedict's brave and percipient attempt to describe Japanese notions of moral obligations by means of an analysis of some of the key words used in talking about them. Her researches led her to the conclusion that *giri* is 'one of the most curious…… of all the strange categories of moral obligations which anthropologists find in the cultures of the world' and that 'it is specifically Japanese' "

概略をいうと「日本の義理は Ruth Benedict が、日本人のことをいう時はいつでも用いられるいくつかの key words を分析して、日本の道德上の義務についての考え方を、大胆に、（筆者…よく解らないのに大胆に…という皮肉がこめられている）いささか靈感的に叙述したので社会学者や文化人類学者の間に有名になってしまった。そして彼女の研究の結果、「義理」は、諸国家の文化の中での道德上の義務の範疇の中でも一番 curious（不可思議）なものであることにきまってしまった。」つづけて R. Dore はいう「『義理』という語は、日本では、種々の歴史に於て、又様々に異った異文化集団に於て、様々な用法があって、決して一樣ではない。Benedict は辞書の言葉に現われているそういう異った用法を、まるで普通の諺みたいに一本化してしまって、日本人の情報提供者から得たなまの情報をもとにして道德上の義務の統一した範疇を探し出そうとしたのだ。」

"The method is a logical extension of her basic assumption——surely a mistaken one——that there is such an entity as a homogeneous 'Japanese culture' or 'Japanese culture pattern' which persists through time and pervades all regions and all social classes; as such the result could not be other than 'curious'. But *giri* loses most of its curiousness if one does not expect it to represent a moral category in the sense that it is used of, and used only of, a set of obligation which are compulsive nature and as all being enforced by the same sanction. （この方法は彼女の基本的な仮定——それは多分まちがった仮定であるが——同質の「日本の文化」とか「日本文化の型」とかいう実体があって、それが時代を通じて存続し、あらゆる地域に、あらゆる社会層に浸透しているのだという仮定を論理的に拈げていく方法である。こんな風だから、その結果は、ただただ curious になっていくのである。ところが「義理」という語は、次の様な場合には、少しも curiosus にはならない。即ち“ある一連の義務があって、すべて同じ強制的な性質をもち、すべて同じ制裁があるためむりにそれに従っているのだが、そういう義務のことを述べるときに道德の範疇として、義理ということばが代表的に用いられるのではないと思えば、義理はその不可思議さ (curiousness) の殆んどを失ってしまうのである——筆者訳）彼はつづけて、彼の考える義理とは何かについては

①自然の気持というよりはむしろ義務感から発生する行為である。

②特別な人とかグループに対する義務感を義理という。

③その義務を怠ったときの罰みたいなのは、相手が不快に思ったり、失望したりする位なことである。

そして「上のタイプの義理感から出る行為が“義理の行為”なのだと云えば便利であるし、AとBとの義理関係は、その関係に影響する行為には上に上げたような感情を持ち易いと説明をすれば便宜である。こうなると、この種の義務には何一つ curious な所はないのである」まさに筆者の云わんとする所である。試みに筆者も「義理」について日本百科事典（1962）をひもどいてみると、

「義理は元来、中国宋時代の儒学者の根本思想であったが（中略）江戸時代、宋学を官学としたので義理が道德の根本理念となり（中略）当時の封建組織の在り方に従って、日本独特の思想と道德観念を生じた。（中略）併し現代ではしだいに名目となり、単に『義理にも』とか『不義理』とかいった意味になった。『義理が固い』とか『義理を欠く』とか『義理の親子』とかいうように『すじみちだった』という意味で広い範囲に使われて原義とは関係なく利用される」

なおこの義理観念の古さについては「この義理が強く謳われたのは、江戸の元禄時代であって、主に町人の道德律であった。町人は上に武士階級をいただき『その分を越えず』（Benedict の “Taking One's Proper Station” にあたる一筆者）という生活が規範になっていた。彼らは体面（“keeping one's name” にあたる）の意識もつよく『人に笑われまい』という観念がつよく、世間体を非常に気にした。ここに『世間の義理』という悩みが生れる」（日本に於ける倫思想の展開一宮本又次による）

再び大百科事典はいう「封建組織の完成した江戸時代に、義理と人情の葛藤による悲劇の多かったことは、これに取材した戯曲や物語が非常に多いことでも知られる。そして封建組織の廃止された明治時代になっても、義理と人情のからみ合った「義理人情」はなくなっていないのである」

以上 The People of Tapan をもとに、Pearl Buckの目の「安易さ」「古さ」「模倣性」を論じてきたが、彼女がこのように不正確な目で日本を眺め、その見たものを著書として内外に発表し、それを又日本の現代の学生が読むというに至っては、内心寒さを禁じ得ないものがある。この教科書のために註を書いた大谷泰照氏の書評、

「本書を特徴づけているものは、著者 Buck が、Benedict の資料一辺倒の方法もとらず、Reischauer の日本生活没入の態度も倣わず、あくまで外国人の立場から、しかも東西両洋に通じた冷徹な複眼をもって、多角的・実証的に生きた日本人を浮き彫りにしている点である。老練な作者の眼を通して、鋭く日本人の本質に迫るユニークな一種の文明批評をなしていることである」（下線筆者）に対して大きな疑義を抱き乍らこの論を終る。（終）

参考文献

- The Chrysanthemum and the Sword (Patterns of Japanese Culture).
by Rutn Benedict CHARLES.E.TUTTLE COMPANY.
- Japan Past and Present by E. Reischauer CHARLES.E.TUTTLE COMPANY
- Two Essays on Japan by E.Reischauer 朝日出版社
- The Year of Japan by J.Kirkup 朝日出版社
- Living Japan by D.Keene 朝日出版社
- Japanese Character and Culture by R.Dore 朝日出版社
- 英語研究、1960年10月号 研究社
- 日本との出会い ドナルドキーン 篠田一士訳 中央公論社
- 日本の原像 上田正昭 角川文庫
- 日本に於ける倫理思想の展開(日本思想史研究会紀要) 吉川弘文館
- 中央公論 昭和五十年六月号 中央公論社